

『釈浄土群疑論』における 別時意趣会通について(その二)

——中国における別時意趣——

村上 真 瑞

別時意趣の説かれた論疏が中国で翻訳された年代と、中国浄土教諸師の生存年代とを比較考察してみよう。

一番最初に翻訳されたのは、『撰大乘論』の仏陀扇多訳である。後魏の普泰元年(A・D五三一)で菩提流支が世親の『無量寿経論』を翻訳した時と同じ年であり、曇鸞の生存中である。しかし、この時点では、『撰大乘論』世親訳、無性訳は、翻訳されていない。もちろん仏陀扇多は、翻訳に際して、『撰大乘論』を講義していたであろうことは、推察できるが、同時代の曇鸞が、浄土教に対する批判と受け取ることのできる別時意趣を『無量寿経論註』等の著作において、全く取り上げていないことから仏陀扇多訳の『撰大乘論』によって別時意趣が、仏教界に論議を呼んだとは考えられない。仏陀扇多訳『撰大乘論』には次のように説かれている。

「二者時節意趣。所謂若称多宝如来名者。即定於阿耨多羅三藐三菩提。如三無量寿経説。若有衆生願取無量寿世界。即生爾。」

と説かれるように、多宝如来の名を称えればこの上ない菩提が得られ、衆生が無量寿世界に往生したいと願ったならば、すぐに生ずることができると、示されている。しかし、それが『撰大乘論』世親訳のように、やがて得られる菩提や往生の因となるということは一言も触れられていない。したがって、仏陀扇多によって『撰大乘論』の釈が訳されなかったことが別時意趣が一般にひろがらなかった原因とも考えることができる。ただし、ここにおいて注意せねばならないことは、『如三無量寿経説』として、『無量寿経』の名をあげていることである。他訳と比較すると、仏陀扇多訳のみに見出される現象であるから、仏陀扇多が訳する時に加筆したものとも考えられる。

次に真諦は、『撰大乘論』と、『撰大乘論』世親訳とを陳の天嘉四年(A・D五六三)に翻訳した。道綽が生まれた翌年に当たる。ここにおいてはじめて『撰大乘論』世親訳が翻訳され、別時意趣の詳細が一般的に明らかになり、それが浄土教に対する批判的見解であることが確かなものとなった訳である。それに加えて、真諦は、撰論宗の祖ともいわれるように、この『撰大乘論』の翻訳に心血をそそいだ人である。し

たがって多くの弟子達も皆、『撰大乘論』を学び、それにもなつて中国全土に『撰大乘論』は広まり、そのため別時意趣もまた、広く一般に流布していったものと考えられる。当時『撰大乘論』研究がきわめて盛んになったようすを道宣は、『統高僧伝』巻第十五において、隋朝諸宗の情勢を

「當時諸部雖復具揚而涅槃撰論最為繁富。」

と述べているように、諸宗の中でも涅槃と撰論とは、とくに盛んに行なわれていたことが理解される。また、そのために別時意趣が人々の間に信じられ、浄土教を信ずるものが少なくなつてしまったことを懷感は次のように述べている。『釈浄土群疑論』巻第二によると、

「自撰論至此百有餘年。諸德咸見此論文不修西方淨業。」

と説かれるように、百年以上後の懷感をして西方の淨業を修するものをなくしてしまつたとまで言わしめたほど『撰大乘論』の別時意趣が流行していたことが理解される。しかし、その当時の撰論学派の別時意趣に関する文献資料は、ほとんど散佚してしまひ具体的な論説を知ることができないが、名畑応順先生によると、近年敦煌出土の古逸書の中から発見された『無量寿観経義記』一卷は、地論宗靈祐の作と推定され、ここに論じられている別時意趣が撰論学派の初期の説と言ふことができることと示されている。その主張とは、

「問。若凡夫生淨土二者何故撰大乘論判為別時意耶。答。此觀無行人故云三別時意。故論云。由唯發願於安樂國即得往生。是名別時意。案。無行人空發願於願。此但為遠生之因。故云別時意要行願相。方得往生。」

と説かれるように、凡夫が浄土に往生するのをどうして『撰大乘論』では、別時意としているのかと、問うのに対して、全く行をしないから別時意なのである。『撰大乘論』にもただ安樂國に往生したいと願うだけで往生することができるとするのは、別時意であると説かれている。なぜなら無行人の人が空しく発願してもやがて往生するための因となるだけであるからである。要するに願と行とが共に満足されていれば往生することができるのであると、示されている。つまり願だけで行をしないものは、すぐさま往生することはできないと主張するのである。

次に隋の大業五年(A・D六〇五)に達磨笈多が『撰大乘論釈論』(世親訳)を翻訳し、続いて唐の貞観七年(A・D六三三)波羅頗迦羅蜜多羅が『大乘莊嚴經論』を翻訳した。ちょうど道綽が浄土教に帰依して後、『安樂集』を講義している前後と考えられる。続いて唐の貞観二十年(A・D六四六)玄奘が『大乘阿毘達磨雜集論』を翻訳、また唐の貞観三二年(A・D六四八)玄奘が『瑜伽師地論』を翻訳、続いて翌年の貞観三三年(A・D六四九)玄奘が『撰大乘論本』、『撰大乘論』世親訳、『撰大

『大乘論』の佛陀局多訳 二
 當時即意趣。所謂若稱多寶如來名者。即定
 於阿彌多羅三藐三菩提。知無量壽。既若
 有衆生願取無量壽世界即生。則
 大正31 103 b

『攝大乘論』三昧論
 二別時意趣。若有衆生。願持多
 寶佛名。決定於無上菩提。不更退還。復有
 說言。由唯發願。於安樂佛土。得往彼受生。
 大正31 121 b

『攝大乘論』三昧論
 二別時意趣。若有衆生。由願持多
 寶佛名。決定於無上菩提。不更退還。復有
 說言。由唯發願。於安樂佛土。得往彼受生。
 大正31 121 b

『攝大乘論』三昧論
 二別時意趣。若有衆生。由願持多
 寶佛名。決定於無上菩提。不更退還。復有
 說言。由唯發願。於安樂佛土。得往彼受生。
 大正31 121 b

『攝大乘論』三昧論
 二別時意趣。若有衆生。由願持多
 寶佛名。決定於無上菩提。不更退還。復有
 說言。由唯發願。於安樂佛土。得往彼受生。
 大正31 121 b

『攝大乘論』三昧論
 二別時意趣。若有衆生。由願持多
 寶佛名。決定於無上菩提。不更退還。復有
 說言。由唯發願。於安樂佛土。得往彼受生。
 大正31 121 b

『攝大乘論』三昧論
 二別時意趣。若有衆生。由願持多
 寶佛名。決定於無上菩提。不更退還。復有
 說言。由唯發願。於安樂佛土。得往彼受生。
 大正31 121 b

『攝大乘論』三昧論
 二別時意趣。若有衆生。由願持多
 寶佛名。決定於無上菩提。不更退還。復有
 說言。由唯發願。於安樂佛土。得往彼受生。
 大正31 121 b

『攝大乘論』三昧論
 二別時意趣。若有衆生。由願持多
 寶佛名。決定於無上菩提。不更退還。復有
 說言。由唯發願。於安樂佛土。得往彼受生。
 大正31 121 b

『攝大乘論』三昧論
 二別時意趣。若有衆生。由願持多
 寶佛名。決定於無上菩提。不更退還。復有
 說言。由唯發願。於安樂佛土。得往彼受生。
 大正31 121 b

521 普來元年(後魏)

563 天嘉四年(陳)

605 大業五年(隋)

633 貞觀七年(唐)

646 貞觀二十年(唐)

648 貞觀二十二年(唐)

649 貞觀二十三年(唐)

652 永徽三年(唐)

720 710 700 690 680 670 660 650 640 630 620 610 600 590 580 570 560 550 540 530 520 510 500

『攝大乘論』三昧論(521)

安樂集 淨土經(608)

淨土論

善導

懷威

淨土論

慈恩(玄奘の高弟)

玄奘

別時意趣と説かれた論疏の翻訳年代と浄土教諸師の生存年代 対照表

乗論』無性釈を翻訳、そして、唐の永徽三年（A・D六五二）玄奘によって、『大乘阿毘達磨集論』が翻訳された。ちょうど迦才が『浄土論』を著述し、善導が長安で活躍していた時代である。これらの中、特に玄奘は、自ら國禁を犯してまでインドへ行き、苦難の末持ち帰って来た、多数の経論を、自ら学んで来たサンスクリットの語学力と、法相唯識の学力をもって、翻訳し、中国に法相宗を伝えその開祖となった人であるから、新訳の『撰大乘論』による別時意趣が盛んに説かれたことが推察される。玄奘門下の別時意趣に関する記述は真諦門下のものより多く残っている。まず玄奘の門下ではないが同世代に活躍していた道世（玄暉）は玄奘の言葉を次のように伝えている。すなわち『諸經要集』によると、

「玄奘法師云。西方道俗並作『弥勒業』。為同『欲界、其行易成。大小乘師皆許此法。』弥陀淨土。恐凡『鄙穢、修行難成。如『旧經論』。十地已上菩薩。隨分見三報。』淨土。依『新論意』。三地菩薩。始可得見。報公淨土。豈容下品凡夫即得往生。此是別時之意。未可為定。所以西方大乘許。小乘不許。故法師一生已來常作『弥勒業』。臨命終時。發願往生。見『弥勒仏』。請大衆同時説『偈云。南無弥勒如来正等覺。願与含識、速奉慈願。南無弥勒如来所居内衆。願捨命已、必生其中。』」

と説かれるように玄奘の言葉として、西方へ往生を願っている者達に対して、弥勒の兜率天の方が行じ易いから弥勒の業を積むことを勧めている。その理由として、兜率は天であるから、欲界と同じ三界中に存在しているから行じやすく、また大乘も小乗も共に兜率上生を勧めるが、西方浄土は、旧訳は十地以上の菩薩、新訳は三地以上の菩薩と言うように高い境地に至った者以外は修し難い所であるとしている。下品の凡夫は、到底往生できない所であるとして、もし凡夫が往生できるとするならばそれは、別時意趣と言ひ、すぐさま往生が定まるのではないとして、西方の行は凡夫には困難であることを主張している。また、西方は、大乘で往生を許しても小乗では許していないことをあげて、そのために玄奘自身も一生を弥勒の修行に勤め臨終に際して、弥勒の兜率天に上生したいと発願して、偈を説いたとしている。このように別時意趣は、当時弥勒の兜率天と、弥陀の浄土との勝劣の論議の中で西方を兜率より劣っていると証明するために用いられていたということが理解される。

次に、玄奘門下で玄奘の訳場において証義大徳十一人の中の一人であった神泰の『撰大乘論疏』について調べてみよう。この疏は、現在散佚して現物をみることはできないが、幸いにも道忠（？一二八一）の『釈浄土群疑論探要記』巻第四に、散佚以前の神泰『撰大乘論疏』が次のように引用されている。

「神泰撰論疏云由唯發願不修其行便得往生極樂世界乃至広説、若依

觀經會此文者由唯發願得往生彼是別時意。若十念成就即是行故非別時也。」

と説かれるように、玄奘門下の神泰は、修行せずして、ただ極樂に往生したいと発願しても別時意であって、即得往生はできない。しかしもし十念成就すれば行であるから別時意ではないとしている。これは、先に述べた玄奘自身の意見とは異なり一応浄土教を認める主張をしている。しかし、ここにいう十念は、善導の口称念仏とは速やかに理解し難いし、この『撰大乘論疏』は、日本の道忠が引いたものであるから、本當に神泰のものがどうか確認する証拠はない。したがって、これが本當の玄奘門下の別時意に対する意見かどうかは確認することができない。

次に玄奘門下でも第一の神足といわれる慈恩（A・D六三一―六八二）のものを考察せねばならないが、慈恩のものは、懷惑の『釈浄土群疑論』と密接な関係があるので『釈浄土群疑論』における別時意趣会通を述べる箇所において、懷惑の意見と比較しながら論述してみたい。

以下それらについては、次号に載せることとする。

註① 『大正藏經』三一巻一〇三頁B。

② 「統高僧傳」一・真諦伝及び十八・曇遷伝による。

③ 『大正藏經』五〇巻五四九A。

④ 『浄土宗全書』六巻二三A。

⑤ 『迦才浄土論の研究』論巧篇一二〇頁―一三〇頁。

⑥ 『大正藏經』八五巻二四九頁B。

⑦ 『大正藏經』五四巻六頁C―七頁A。

⑧ 矢吹慶輝著『鳴沙余韻解説』三七三頁。

⑨ 『浄土宗全書』六巻二三八頁B。

『大般涅槃經集解』の撰述について

大澤 亮 我

この書は古來からの注釈を集め、宝亮が梁の武帝の勅によって撰したものとされていた。それは『集解』の最初に武帝の序が挙げられ、その中に「以三天監八年五月八日。勅亮撰大涅槃經義疏。以九月廿二訖」と記され、また、『集解』の序の下に註して